

新春^{ていだん}鼎談 2020

アートと文化交流の活動拠点に



東京芸大美術学部長
日比野克彦

取手市長
藤井信吾

東京芸大特任准教授
伊藤達矢

撮影地：藝大食堂(芸大取手校地内)

とりでアートギャラリーがボックスヒル取手4階のたいけん美じゅつ場(VIVA)にオープンしました。今年の新春鼎談では、VIVAを拠点にした文化交流や、「アートのまち」としてどのような取り組みが考えられるか、語ってもらいました。

藤井 VIVAは市と東京芸術大学、JR東日本、アトレの四者が連携し、整備した施設です。アートとコミュニケーションの拠点、複合文化交流施設として、市の芸術文化の発展が期待されます。

VIVAは、他の空間とは違う仕上がりで、さまざまな可能性を感じます。**日比野** きっと市民も何かやりたくなる、そんな空間ですね。新しい世界をのぞきたくなる気持ちにさせてくれます。

伊藤 運営は取手アートプロジェクト(TAP)が担当し、オープンアーカイブには芸大卒業生の作品などが展示されます。また、とりでアートギャラリーでは市民の皆さんの作品も展示されますので、それぞれが混ざってチャレンジの場所になると思います。

立地を生かした運営を

藤井 新しいネットワーキング・気付き・発見のきっかけづくりの場になると思います。駅直結でアクセスが良いので、ここを知らない人が、ふらっと訪れてくれるかもしれません。

日比野 普通、文化施設には、明確な目的を持った方が来ます。でも、VIVAはさまざまな年齢・目的を持った人が迷い込み、ここでしかない出会いが生まれる場所になるでしょう。

伊藤 アートは人を抱え込む力を持っていて、いろいろな人をつなげていければと思います。それから教育の場との連携も考えています。子供から大人まで、きちんと学べる場になります。取手発の新しい学びのスタイルをつくっていきたいです。

日比野 ここを好きな人が、自分で使い方を発明し、初めて来た人に伝えてほしいです。次第に使い方が変わり、それが連鎖していきます。どんな場所にも、ここをどう使うかのルールがあります。でも僕は、それさえも利用する方たちで工夫してほしいと思います。

ここでできない運営にチャレンジすることが大切でしょう。**藤井** 単なる貸し館になってしまっただけの意味がありません。オリジナリティーがある発想で、フランクな場にしたいくものです。

活動を紹介し合うギャラリー

藤井 現在、取手美術作家展(とりび)に参加している作家が37人。その他に、壁画やイルミネーションなどに関わっている人200人ほどが市内で芸術活動をしています。**伊藤** 10万人の人口に対して、2000人は非常に多い。ここまで多い地域はなかなかありません。

藤井 これまでも「とりび」では、美術作品がある中でコンサートも行ってきませんでした。美術作品の展示だけでなく、音楽とコラボして

も大きな効果が期待できそうです。**伊藤** とりでアートギャラリーは、音楽家や郷土作家、市民など、多くの人の活動を紹介し合える場にしてほしいです。

藤井 そうですね。流れの中継点となる、つなぎ目やのりしろのような役割を果たしていけると思います。**伊藤** 駅ビルにいる高校生、買い物客が「なんだろ」と思っちゃってくださる。今まで見てくれなかった人が来ます。取手で作品を発表すれば、多くの人の目にとまるようになるんです。これは制作する側の意欲にもつながります。

日比野 人に見せることは、見せ方を考えることです。それこそ額縁にまでこだわりの出ます。キャプションも当たり前の内容でいいのか、作品に対する自分の思いを書いたり、エッセイを書いたり、トークショーもいいですね。

未完成品を持ってきたっていいんです。「最後の仕上げはここでする」のもありです。もっと違うやり方ができる、やっばい場所なんです。



日比野克彦氏
東京芸術大学美術学部長。国内外で地域性を生かしたアート活動を展開し、取手アートプロジェクトの実行委員長を務める。また、たいけん美じゅつ場の総監修も担当。主な研究テーマはメディア、コミュニケーション、ワークショップなど



伊藤達矢氏
東京芸術大学美術学部アート・コミュニティ形成事業特任准教授。平成16年から19年まで取手アートプロジェクトに参加し、取手リ・サイクリングアートプロジェクト2004などの活動に携わる。主な研究テーマはアートコミュニケーション、アートプロジェクト、美術教育など